中村俊定文庫
文庫 18
577

誹諧歌序

抑こゝろや古今和歌集乃始うたとさとうあるこゝろはよしれるもつ称の人乃こゝろまふ所乃事なるこゝろ者そ乃中に乃もわけて誹諧奇とこゝろ称ふこゝろ者ものこゝろをうかふつるこゝろ乃ものにて乃ものをうかふ所也に乃もあるをを大こゝろふもれぬるに乃ものこゝろ者ものこゝろ也学ふこゝろ我なるこゝろ者ものこゝろ成ふこゝろ乃ものこゝろ誹諧歌の解とこゝろ書を拾

来りて人をとる者は狂色つゝしまざるふ
ふそのまゝせるふ不乃歌ともの家〳〵ぬ
ゑ色ゑ狂ゑる神祝ちゝ〳〵称ゝ分のゝ
こゑ狂のふつきをもきものれゝ実ゝのく
耳ちのくゑ中奈そを学乃う人の菓
祝ゝるゝこゝふゝかいつゝ称ちちめふ
ゝちいうなるゑ分の先達ゑん去祝
狂ふゝものゝゝやゝ田ゝあつゝ仏ゝ
あふく芭蕉翁の門人支考ゝ書ゑ
なりゝゝもゝゝん世ふあゝ時ゝ虎やま

とのゝ文ゝもゝゝゝくゝゝは道ふ博士の
名あり俳家くのゝ文ゝもあゝゝゝ乃ふ
市ゝゝ世人なゝゝゝかゝゝゝ書へく
もおほえゝゝゝうゝゝこのゝゝ月を屋て
世人ゝゝゝゝゝゝゝの壁乃中ゝも
かゝゝゝ我のゝゝゝゝ人をゝゝし
ゝゝゝのゝゝあゝれゝゝゝゝゝ完
世やゝくなゝ老の命ゝかゝふゝ実ゝを
ゝゝる時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ
ゝゝ謙諧ゝゝふ道ゝゝゝゝゝゝゝ人ゝゝ我の

おもしあるこゝろをよまんとの書をよこせのうちもゝ俳諧の句をふ
ゞるふへきこゝろをもて

天明三癸卯十六月

鏡蓮幻阿弥陀佛書

古今集詳諧歌解

東花坊撰

詳ハ俳の字なるをなぞらかるる草字乃相似られど。詳をなまきあるべし。俳をゝみハまきせ。諧ハ文心雕龍ゝ悅笑也。前漢叙傳ゝ辞、詼、諧倡、優。晉書顧愷之傳。愷之好諧謔とあり。諧もさハぬ礼也。堯山堂外記曰。張文成工為俳諧詩賦とあり。唐ゝゝも俳諧體乃詩あるゝば即日本みても此語を用てたハぶれる奇乃殊の名とせるゝ。滑稽ハ滑稽みるぞゝへらる。滑稽を王道ゝあゞざきた。妙義ゝゝとて。時乃用あり。

佛法にも是なり。戯関(げくわん)を先(さき)として人の心を悦バしめて引(イ)て道に入らしむる。鎌足(かまたり)の戯(たはぶれ)。にも見えたるハ此事。用に立る如し。聖人だに戯あれバ誰かよろしくたはむれざらまじの事ならん

八雲御抄にこれハいかなるをいふかしらん。まさしきをしれる人なしとぞ。むつかしき事に註せさせ給ふに愚案此哥作者みづから俳諧哥をよまんとてよめるにあらず。貫之の哥なども撰せられし時。さはなしすまじき哥を別にとり出して俳諧躰と名目をあてて見せしめさるゝ也

定家卿の遺書に云。古今乃誹諧哥ハ相傳此人全くなし。公任卿に御堂関白殿乃向ひたまひしかども決なり秘して知らずとぞ答へられけるとかや。家の重事古今此大事なのうちなきをもやせそ世にゆるさき事也。人毎(ごと)にとぶはいかれをバ狂哥とばかり心得侍るやどうり。不知の此またなりにて至極を知らぬなるべし。凡っさるにハ笑し形の心ほかなふし。ハべるほしばかりにと申さ時ハ利口になる所をみずさしむき古き心あるべし。さなきもみな心を法とす。然れバものゝりも性をいかに勞利口しくあるべし。秘すべき

さて。今案ずるに。なまじひとくしき大事にぞ。ぞまでの大事は奇を。古人ハ何とて俳諧とは名ばかりなるぞ。も乃いひ出たのりもせんをいハるゝハ常乃哥もちろん。俳諧ハ限らぬ。詩哥のなりひゝ。ゆゑ俳諧と乃ゝ思ひて。常哥奇は詩ゝ乃ゝ乃ゝ乃の如くるん事をおもれゝ。ゆゝみおくるゝ。ゆゝいぶよのゝ。これ俳諧の内りはいゝ。ゝ。ゝ哥もあきばかる面をよるゝ知ん人を。是我秘事とてみゝゝとゝ人ゝかゝゝぞ。畢竟ハ先を知ゝでも哥の道ゝとゝ我のゝ事なれぞるべ

し。八雲御抄ゝの侍るハ。唯哥ハ艶りまさしくよむものとおぼして。説を付たまハぬゝこゝ我。公任卿も定家に世ん心ちするぞし。もゝとゝ乃ゝ哥我こえぞきを乃あまぞ。惜みて秘ちまきとゝるゝ。俳諧哥ハ詞をゝるゝみゝゝゝれば。常ハ俳哥ゝりハ面白し。もし人ゝよろこぶ。ゝ哥ゝ乃ゝ哥ハ面ハ白しかるぞし。然まゝ又多ゝむゝちりハかるゝゝ乃哥もなどゝゝ代ゝん今の俗ゝ云狂哥ぞまゝ哥とハ又自ら体制せんとゝるゝぞ。すこしく哥ゝ乃ゝんをゝ多ゝ我ゝ乃ゝを

混ぜへらん。愚が葉云ところの俳諧ゐ抜きうゐ此ゐ出
多ア。故ゐ今此哥乃うちゐ俳諧ある處を挙て門
ゐ遊ふ人乃ためにとゞ侍りしよく翫味ゑべし

題志ゝ淀

梅花みよと我きつま鶯のひとくゝといやをしもをる

哥は心を吾ハ梅花にて見ゐ来ま。鶯ゐ来ゐ来ゐ来ゐきよ。
我をおそるゝハゐゐゐと我ゐ。鶯をしゐとゐゐゐ俳ゐ

素性法師

山吹の花いろゝ咲もぬしやきたにぞとゝ鳴ゐ

色ゐ形しゝと云を人乃にのゐきやといひゐしゐゐゐ俳せ

菅原敏行朝臣

いなばくゝ乃田をゝ行ゐ田だゐ郭公ゝゝはゐゐゐ鳴ゐくよゐ

しでのたをさとは郭公の一名なりとふるきものにしるせり。郭公
しでの山より来りて農(のう)をすゝむる故にしでのたをさといへり
此説あるよりはしでのたをさは郭公の一名とせる事たしかなり
なる説もなし。万葉集に見えず。もしふるきよりも一名とせば歌
集に郭公をよめる歌いくばくと云数しらず。猶よくよめる
ば必しも出せるべき事ともなし。伊勢物語に出たり。今この歌
も敏行の歌なれど業平朝臣時なれば混ぜる所なるぞ。伊勢
物語の歌をかかる歌かとてぎもをよみしゆゑ。しでのたをさを
此にはとゝぎすをそへてよめるなり。それゆゑ庵(いほり)あまきの詞
なりと。これによりておして言へば農人を云詞なるべし。催馬楽(さいばら)に
妹が門やせなが門行すぎかねて我ひちばひち笠の。ひち笠の
雨もふらなん。しで田長。雨やどり笠宿り宿りてまからん
しでの田長とあるも。詩經に田畯(しゆん)を昔の点に田をさとつけ
さし田をもちて作るにはあり。しでは賤の字にて。しぼと同じ

きゝいまだ見あたらず。然るに此歌催馬楽にもなく方言俗語(ゑうげんぞくご)なる
べし。いで石をいづしと云。秀づるをひいでるとも云へば、しづをしなと云
ふじきに非ず。しかれば古へ農人(のうにん)をしでの田長と云るなり。歌
の心も、ほとゝぎす鳴は苗を植ふ比より夏秋かけて啼ものや。
これほとゝぎすをばいかにと田をもちてはやくうゑさせなん。朝ごとに
来りなきて農人を呼出して田をはやくうゑる事をすゝむる
ぞと云へるなり。郭公の田をもてると云所俳なるべし。栄雅抄
にもこれは催馬楽を引てこれいくばくの歌も然しでの田を
持と同じ心といへり。催馬楽の歌にはほとゝぎすあらしたる事
なくてなし

七月六日たなばたの心をよみ侍る　　蓑笠の手すさ

九月ばかりまでは織女に限りていふ詞なり。然るに此歌は牽牛(けんぎう)の歌と
みえたり。詞書にかづけるに似たり。此まどたなばたと云を七夕の

「すくく
兼そと
ふるさく
さくの
つるよく
ちづく」

ゆみ一てをぐてゐるすゑのかきたるとゐうく出るう

いつうさとさくんをとゞまるあぜてあまけうハうをりまるてゝん

まさくハまさまゝゆきハかゝてゝ。兼てまんいつうあいんと思ふ心
るかゝ七日をゆちうま六日みもを拾をとゞまでこうぜゆて河
をゝるゆんゝ。はぎりあぜゆと云。又七日みをゝるを
六日みあハてるゞ俳なるゝ
題一ら歩

むりどもすゞつきるくゐゐぬゆいづゝハ秋のるゞ一てゐよハ

七夕乃名の紙をてゐるゆけをゝゆいたゝハ秋をどいつる而俳し。
むりどもをむりみ一たゝむ詞をとゞ又むりすゝと云心るゝば。
男女交合乃まゝ。こは句俳るをゝだむつどをゝてゆゐるゐべ。
いぼゝハ秋とハ常は奇はゆもよむ一。

兄河内三ほ

秋の野ゐなまめゝたてる女郎花あるゐ一かゆ一花も一ゝ兄

ゐまめくハゐくきゝへんとゐるゝばゐをめくし。兄ッゐまとハマハゝう
みゝゐゆゐなゐゐをゝ云河ゐゐ。あ兄ゐ一かゐ一ハ河ゐゝゐけいゐ
をけゝハハゞ。女郎ゐけけゐ方へゝゐるゝゞて女の名をゝて八寂
ゐけあゐゐゝゐり似ゝゐゐを。あなゐ一ゆ一乃ちゐや花とみゐる
もたゞ一附乃事ゞとゐ一ふる心。兄ゐの奇俳とみゆると
ころゐ一。ゐゐめ兄ゐるゐゞとなゐゝんゐ。ゐゐるゐ女郎花乃奇
秋部ゐあゐゝゐるとていばれも女ゐゐ一てゐあ利

たゝん人一ゝゝ

秋くれば野ゐゐみハゐをゝゐる一いづゝ兄人ゐゐゆまでみるゞき

たはれたる女郎花のなまめきたるを女と云より事なるハなしと云。ことに又
色めくはなるなり。つまぶみ見るべきと八人ははみて男子専乃
よしを志らるを摘（つむ）のはなり。女のはぢと指まそつむる
男乃はまでたる事也。これを俳とまて。冶容誨淫（やようくハいいん）（ヨサムルハカタチヲ　ヲシユルイン）乃心にて女を
いましめたまひ

秋霧にたちかくされてくらきは女郎花はかの姿もみしがく隠るる

女郎花を女子にしてためり。女乃人にみえさくもはづると。又恥らしく
もあるなきき乃はなをいつとみえずなりまするとなる花りいづる所
俳なり然無し。女は人にみらるゝを恥る八本心にてよきなまぞ。上乃
哥に反してよそなる心根をむこのく話ぞなり

花とみるおもわんとすれバ女郎花うかれある時まの名にこ者ありぬ記
ころをとらるてと通じていへる。日本紀に奇偉（うさて）と書る。されやらなり

とんでおもんとををとぞ。なにまたく。枝も長くおろごりて。奇偉
なるすがたにて女郎花といふハなぶ名のみえと云ころかや。それなら
ぞやさしくよむ女郎花をふはらに云ふを不俳なるべし

寛平御時きさいの宮乃哥合せんに

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴

在原むねやな

たき物にハ藤袴をさせといふそれにはづりとはまをとつくるなり。はづ
はぎそとハやぶれたるきぬなどをぬひさしてはづるなり。其させ
り藤をこのむ。はを蛬と名ばなりたる蛬（きりぎりす）乃鳴るる頭注にも
蛬乃はづりとさせと鳴るにハあらずといへり。ほころびと花（ぬひ）にさき
たるを云。ふ了ハやぶれたるほころびりしてちれを縫はぶる
と云が俳なるべし。嬾婦（ぶらうきんぶ）をいましめたり

あるとき雲たなんせーりるふ日。こるぷとの乃家のくさよりの風の雪を吹こーりるをみゑぷろけとなりへようこでつるハーゑゑ

清原明のやぶ

冬かごろ春乃とるとはちられば井ゞ犯よりゞで花ハ霞りまれ

隣家の人逝あり。文戈ゐる人ゆゑ。ゑゑ。よみをくまるゆゑ人々と表と乃中垣ゐり。中垣より むは散といつる俳なるべー

歌ーりるを

いろはのえゑとゑーこひの孤さびてたるに家ハいつゆ(ゐぞね)でこの孤はる

拾遺よゑこび入さるゑハ落句子ぎでうねはるとて伝者為京忠房ゐりゆいそはうんハぬるとゑーー恋といんためゆゑ。孤さびくハるれをこゆこり乃ゑふりこるゆをゑみさぶといつり。物はふるきハ精霊(もい)ありてたとなるゆゑ其公ゑ山ゆ。吾年いさ

しくるゆゑ意のあるとゑふるくこるをてる孤乃ゑゆとをゑゆゑん。猿も月乃あハぬとゑ。詞ゑハ俳ゑくて心ゞ俳るり。西とゑりおこのーくゆきて言つるゑ

枕よゑと詰とり恋乃せゑくゑ孤バせんのこ風みゆ我とゑふうゑを冬

夜ふーゐる床乃ゆとこ犯より恋と云ゆりこ乃をゑくまばせんこるくて床の中ゑいぬるとゑ。是も寄ゆ心乃俳ゑ

恋ーきうかこも方こう有と我ゆたてまを孤ゆなる犯心ちが(する)

こゆーさうハ意ーゆ哉ゑ。甚恋しーさ人乃方バ吾あハぬまてこゆ。そと方の知ーまてありときくくゑ。吾を立てゑ居てゑ心のうゆれゑ無どーとゑ。下の句ゑゑてゑをれと詞を寄る故ゑ。上ゆ句ゑ方を寄て(子)ゆりあハせてうり。業平の奇ゑ此狂多ー。ゆてハいのなる西俳るーん知らゆ沒

ありぬやとこゝろみがてら相見ねバたはぶれにくきまでぞ恋しき

相みずば命も危きやうに云なるハせバ中にもあるべしやむかしみがてらにあひ
みずして居きバ猶とり命もあやうきなれどさまでもあらず。此半戯有
こゝろみんとてせしが実に命もなくなりゆべきまでにかゝる戯ハ為にもさ
おもひたるすなはち此なぬ程のこひしさなりと。心の誹なるべし

耳なしの山乃口なしえてしがな思ひの色のしたぞめにせん

顕注におもひを忍ぶ心まで。耳なしと人ありきゝじ。口なしハ人
にものいはじと云心也と云々。おもひの色とそおもひ乃心に緋
をかさねなり。緋乃下染有くちなしを用る也。其の詞心も俳く

足曳の山田乃そほづをのれさへ我をほしといふうれはしきこと

此哥下心にハ僧の色ばかり好めるをそしれり。哥おもてにてハ只ゆゝしき

とみなる位乃人をそしるにいひなせり。そほづハ藁草(わらくさ)にて人形を
作り破笠(やれがさ)をきせ。弓矢をもたせ。田の中におきて鳥獣を
おどろかさしむ。後にかゞしと云。雨露にぬれてそふりをはなれそほつと
いへり。我をほしハ家を欲(ほり)するごとくものを恋る也。まことハ俗に
いふきみわるくなるも。然さものゝ有恋しうをさくろく思ふなどいふことハ
したるにと云心なり。そほづに僧都をかくし。我をほしと法師をも
半せなり。是を俳とるに僧ハ後世に本乃望のゆくといへると同じく
てかゞし乃ぬきさ面なるをみて。美女(びじよ)麗人(れいじん)を恋る事の似つかなき
をそしりたるなり。六帖に今もなほ置てら田にたてるそほづかる
秋たてぬべきよもとなからとあり。そほづを僧都にそへなしたる証也

紀乃めのと

ふじのねのならぬ思ひにもえハもえ神だにけたぬむなし煙を

富士山乃神も其の火をやめ玉ハぬを俳とせり。これハ人乃いかに恋てもる

らん意をすらをおこしるるなり。そをを神よりしてこゝるこ。神よりしたる
ゆゑ上乃侍をそしをるゆゑと形〳〵べおきをきり。富士の祢乃ゑをゞハ。
ゑてみ下の句乃上よおきて見るべし。ゑ元ハゑえとハをゝゞもをえ
どをとゑ心るを。言ををゝよゑるなり。をしハをえよゑゝゝて下
知をるゑ非ぞ。凡〳〵への字をを乃ゑ法をを下和の泊となるこ。言へ食
へと云類せ。このゑえれえハ添吠と同じく。其泊ゑえ来をてるえの泊
し。消しよ。添えよ。吠えよといをゑぞ下和とゑゝぞ。おの心形〳〵ぬ思
ひの火ゑひゝをしゑをゆるばこりなる伐。其人の思ゝるゑ〳〵ハ富士の
山也。形ぞゑむかしき烟を常ゑたて消しゑ来のゑゝぬゑを
ぞ。ゑを人ゑれぞさゑるべき来とんむゑし煙ゑ胸の烟と云ををへ
たり。ちかるゑ。ちいやふる神も思ひのあをぞこを世をゝてふゞ乃
山もをゆゝめといゝるハ。俳諧とやぞ。これハ人也思ひを山ゑゑとゝる
までゑり。故ゑ常の句ハ歌向ゑり。そハ富士ゑ実ゑ也の思ひ乃
あるゑゝて人のゑゑをゝゝるゆゑゑ俳とをるなゝん。

あひみまくかゝハうのゞけく有かゝる人ゑ月ゑ見ぬ国ゞ乃ゑ

きのあをゝ也

乃ひみまくかゝるおゑふをハかゞをゞをゝもるくありなゞゝ。人ゑあゞべき
ゆきゝ乃ゑきゑ思ひまをふと云心を。星と月とゑゑをてゑめを。ゆきゝ
かゝとハをゝゞゑもいふゑゝ。便宜ゑきなを。栄法。星の字ずなく
多き歌也月乃ちゝゝゝハ月ゑみといひるゑを。星ハかずゑく人ゝり
月ゑゝこの詞ゞ俳ゑるゞゝ

小野小町

人ゑあハん月乃ゑきゑ思ゑてむゑハゝをゞゑんゝゑ者伐を

題注ゑハ月のなゝれ歌をとあを。思ひおきてハゆきゑきゑを者ゝ
より思ひおくといふゑ。おきゑゑ伐をゝゑり。胸はゝりゞとハむゑの
さハゞゝとはゝをとゝゝそれと者ゞゑゝて心やくとハゑめりゝずべて

心乃はげしきおどろくハ皆火氣のする所なればいへり。思ひおきてハ思ひのおこるとつくるべし。しかれバ火乃おこるごとく火をおきと云も同じ心よりなるや。声をとりハやみたるも。居るといふ事ハあじ。狗え志りしたるなど俳かいん

寛平御時きさいの宮の歌合乃うた

藤原おきかぜ

春霞たなびく野べ乃若菜にもなりみてしがな人もつむやと

霞のたなびく野べにハ人もあそびながらつむとしるべし。我この若菜なりせバ人にはやくつまれてうれしからん。今ハ年よりて人もつまるゝ事もあらぬぞといへば。つむハ菜を摘みてそれより人に君(こが)ほどをつめらるゝをそへたり。女子になりてよめるなり。人にほめせられまほしきと云が俳かいなり

題しらず　よみ人しらず

思へども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山乃あらじとおもへば

諺に何事によれ此方(こなた)の事さへ事て一まだ知らぬを物にうとき人と云へ。人乃心多きを霞にたとへて。いひなせるなどれど人にかくて今ふとおもへバ心にくゝ思へども。猶うとまれハせぬとよ見り。いづ方にともまたく方にうとんずれども思へども猶といふ所にかゝる心離し。伊勢物語のうとまれずうとうもせのこといつるも同じ。この歌かゝると云を俗言にと世するを俳とそべし

平貞文

春の野の志げき草葉の妻恋にとびたつ雉乃ほろゝとぞなく

しげき草葉のはかなき事とハ雉にとよせてよめる歌の詞なれバ妻恋乃しげきを心をしげき草葉ぶとハよせたり。ほろゝとぞなくハ雉のあはれにんせてほろくと涙のこぼるゝといへるが俳也

きのよしひと

秋の野に妻なき鹿の年をへてなぞわが恋のかひよとぞ鳴

寄鹿恋乃公ゐり。鹿のなくあゝをうひとといふすいゐゐる心ぞ考ビ。
かひよとぞなくと云を俳とやるゐん

蝉のはゐひとつよりも紀夏衣なる狩ばゐり彩ん物ゐやハひゐ

夏衣ゐうすきゆゑ蝉の羽乃ごゐ紀ひとつといふ。たてぬきれ絲のなゐみゐふゐもゐ。それを身ゐゐれてきゐるなゐば必ず絲のゐり合んとゐり。我ゐうゐ紀人なゐどゐ。えさすゐゐるゐむ川まゐぐゐみせば必ず我乃ゐゐ来ゐんゐもゐをとゐり。なゐゐ（みゐ）ハ（ゐ）裏乃字なるべゐ。ゐゐハよゐとゐんといふる俳ゐゐゐん

かくゐぬの志ゐゐりおゐるねぬゐるハの祢ぬなハゐじくゐるれいとひ弧

かくゐぬの志ゐゐりといふるゐゐ。ゐびくゐ乃公をぬくめゐ。祢ぬゐハゐゐうけてゐゐゐゐも乃祢ぬ君ゐ名ゐよゐたゐじ。ゐめてハ祢公ゐゐりゐゐんひゐゐるを

だゐいといでかゐハせゐゐゐ。ねぬゐゐいゐ（ゐん）ゐるなゐ。ゐゐゐといふハゐハ乃縁ゐゐ。
ゐ乃ゐゐ祢ゐゐいゐゐ。女ゐゐゐゐ祢ゐて祢ゐ名の志ゐゐ乃あゐん。寝（ね）ゐ乃
名の志ゐめ一ハゐゐゐわゐゐ。ゐゐゐゐ乃ゐゐるのゐをいゐひゐふゐ。はぬゐハ
ゐゐてゐじといふる心を俳ゐゐ

ゐゐん人ゐゐゐ

どゐるゐハ思ゐゐびゐゐゐハいひはてぬゐゐでゐ世ゐゐゐゐまだゐゐゐゐゐ

題ゐゐまだゐゐきゐハかゐゐゐゐゐゐとゐいひゐせゐゐり。中ゐおゐハゐゐといひき
ゐハゐゐるゐきをゐゐゐゐゐゐとゐ。乃ゐゐゐ。ゐゐ（ゐ）ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐバゐゐゐてみゐゐくゐのゐゐゐゐ君ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ約のどゐくき
たゐどゐ打ゐゐゐぬゐといふり。ぬゐゐるゐゐバ向ゐいゐゐといひはゐゐゐがゐゐゐといへ
ゐゐを俳ゐゐゐゐゐ

思てぬ人乃公の屋どゐたちこの多ゐ俳ゐてゐみゐゐゐゐゐゐゐゐの邪

くまとハ曲乃字なり。心のくまなく心りみくを而あるを道のくまよ
くせて云つりられを思ふと云人也言ふことしかるねど。人乃心れ曲よ
のくまを指て虚実をみくしくとぺ心俳るるつ

思ひどもゐるどとぢいふまバいるみやあるつど　おとをぬうひよ

六帖よいるやもハどと今ハおもハどと出ぢ。吾ハ人を思ひどもるをを人は
思とてせどしてゐいハをなといふるまバ。今よりハかよいるこて思ハど
おもふかいれ〜とし。この歌俳いづこゐん。六帖乃ごとく今ハなまバよ
きこてたぢいるやこてハ肉えがさし。いるとハいるむ心。こてハ先より云ら
くるるもなまぢ。いるむるすハふし。いれやと云り及ぶど。ぢ〜くハ下
乃句よもあるいでやなるべきぢいぐやなれバ思ハぬとおーあてよ言ひ
ゐをるれバ。ぢ〜ふふすとやめんと云るみり

我をのくゐふといそであるべきぢいでやん乃おゐぬちみーゑ

君が函をゐふとゐるべば。吾バうりこてなるべきをぢも見えぬみり
といふをぬくみてぢ〜バ女の心を大幣中乃ごくひく人のあまとあるる
みてなるべ〜とし。いでやぢ〜ばともさてハとも云初るを

ゐをぢ思ふ人をおもハぬ報ゐやロの思ふ人乃家をおもハぬ

公任卿の和哥九品乃中よ此句を出〜てがしおとふ処あるかりとハ了ぢ
句並よ上の句俳きこゐる所をえんとべ。九品の中よ入をきバよ
な句みこそあ〜免

一本
ふうやぬ

思ひゐん人を我ともよ思ハぬ思さ〜やむくひなるり上
ゐをを思ひん人をとゐとりみおもハまーをぬをまぢ〜やおを人を
ゐるハぢりしむふひのるゐとりやぢ。今ロゲゐふ人のあひゐ
ハぬとぢ〜き人よ初ひて昔のるをとゐるみり。上句同ド

出てゆく人をとどめんよしもがな
　　題注ゝはかひなるすを出せり。其心とは思ふ人乃あいんとて鼻をかむ
ふるを万葉ふみ出さゝやこてる人乃事ども心もとゝきていもせぬ出てゆくゆゑみこれを
出でめんよしもがなとゝ。これハ占の心なるもバみばうゝ鼻ひてハせんなくて他人乃ハる
心を用るゝん

ねるそ先心もたの事ぞ人をあくゝハうつるてふなを
　　紅ゝそめしゝ心ハふかく思ひしゝ事をねの衣ゝゆていりあくハ戻汁し。
そもを飽りよせうゝ。ねの乃ゝを戻汁ゝそゞてうつろひゝるもの
このあくゝ〜つるとゝ俳とゝさて

いとゝ乃ゝ多ハ雲の詞なるもゝ
　　題注ゝ馬をも牛をもえゝあちこゝふをバ野飼とゝ。そもゝゝよゝ出て人をゝ
ひえゝ乃ゝをものゝゝとゝ。この心なるハバ山のミハゞゝしくゝみつゝもあ
ぬハゝ乃ゝりて未ゝ乃ゝ乃ゝをしゝかゝゝゝゝ。野飼ゝてゝゝと云心なるもの。この心俳ゝ

常の出ぶ乃ゝどり乃ゝ
　　ぬるゝてハ人乃ゝふふ山ゝゝよゝせゝり。此ゝ俳いゝん

山ゝらゝ夏ハ人まゝさての事ふ乃さゝく君歌を見ゝ心ゝとり
　　さのゝらハ俗みかゝこゝてといゝる似ゝり。夏夜吾ひゝりぬるもゝとゝ
いぬる人ゝまゝゆゝゝれゝり。そゝまゝをのゝこゝゝゝうゝみ人まゝゝてあつゝさゝり
猶りぬるゝゝゝるもてゝ。このゝ乃ゝさゝむゝ歌も心ゝとゝいゝく
はゝゝ寒ゝきとゝ。人ゝふゝるゝさゝしゝるゝ。又ハゝゝどゝるハぬゝりよゝゝるゝり

長き人まつといへる俳なるべし

平中興

逢事の今ハはつかに成ぬれバ夜ふかゝらでハ月なかりけり

栄雅抄にあふ事の今をはつかを廿日にいひかけて夜ふかゝらでハ月を待チえぬ心ばへしに思ひなぞへてよめり。でもつきなきを月なきにもとせしところが俳なるべし

左のおほいまうちきみ　これハ枇杷左大臣也

もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれんと思ふ我ならなくに

此歌ハ仲平乃伊勢が大和にゆきたる時になぐさめてよみてつかはせる歌なりと云々。よしのの山ハふかき山也。其吉野山がもろこしにありとも君にをくれじとなん。それを唐によしの山あるやうにいひつるが俳なるべしなりかし

雲はれぬあさまの山乃あさましや人の心をみてこそやまめ

栄雅抄に雲の晴やらぬあさまの山によせてうすきまでもわれおもふ子乃あさましや。人の心はいかならんと見てこそやまめ見ぞハやまじといへり。此歌の俳ハいづくならん。愚案此歌ハ男の心乃あさはかなるをきけり。見てこそので文字濁るをよしとす。のるなきさまなる心のおくを見るに及ぬとい見ぞしてといへん為なり。どの五文字なり雲もなきぬとあるり。此歌悪なりのきこゆぞ

伊勢

難波なるながらの橋もつくるなり今ハ我身をなにゝたとへん

世の中にふりぬるものハつの国のながらの橋と我となりけりとあるをこそたえ見り。此橋ハふりたるところに用ひたり。ふりてもまだ橋乃ことあるゆへにもにみもるにそしゆるん。今ハつきこえて橋の詠もなし

しバ吾身のふりたるをたゞふゞきとのみしとよめり。ふりぬるとよみ
きさまる橋をわたるとよめる俳とをつくるを造ると見て哥もきこゆ
るを。それそれハ哥乃一粋おもしろかりし

よみ人しらず

まめなれどなにぞハよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

まめなれどとてハ真実なれども云心で哥乃心を俳とせるが。作者の志也。世の是非乃さだまらざる事多きをいきどをりてよめり。史記伯夷傳乃こゝろなるべし

おきかぜ

何かその名の立事の惜からん志りてまどふハ我ひとりかハ

まどふとハ女色にまどふなり。万葉ふみにたきやめの惑ひといへり。言の心ハ色まどひ志らねバせんかたなし。知るがしる惑ふるれバまたもよくも心えてまるなり。

此哥ハ何ぞ名の立事をおしまんや名乃立ことをおしまばまどハぬこそよけれとなれバ惑ふも吾ひとりかと思ひて悔しが世中の人多くぬ此道にぞ迷ハしむつき事をとよめるなり

いとこなりけるおとこによそへて人のいひければ　くそ　屎ハ源告が女也

よそながら我身にいとのよるといへバたゞいつはりにすぐバかりなり

よそながらとハ他人にして己が身にいとのよるといへバとハ。いとこによそへていへるをいとのよるによせたり。いとこもあらぬ人乃いとこなるおとこ何ぞ思へて此はすハ。身ぞ偽りにすぐのみなるとならんすも針にすぐとよせたり。すぐとハまめなる心なくて、ことのまゝなるをいへり。いとのよるといへる俳なりん。此て身にあやまちなけれど人いかゞみいふならんかしらぬなり。いつはりにすぐハ浪の緒をぬきてといへるを同じ。針に糸をとほすをいふ。いとこの云よるを云ハ吾ハ偽を云かく

なと思ひさぐるそえといへるか

題しらす　　さぬき　安倍清行が女

ねぎごとをさのみきゝけんやしろこそはてはなげきの杜となるらめ

ねぎごとゝハ神にいのりねがふ云へ。さのみとハさばかりと云が如し。なげきの杜ハ大隅にありと云。此うたハ讃岐が我身の上を云にハあらで。よその女子乃心よわくて人乃ねぎごとを我くるしき事とおもひてはらみなど也そのなげきをいへるか言ぐさを以て俳とすべし。かくみれバ女子の戒ともなるべし

なげきこる山とし高く成ぬれバつらづゑのみぞまづつかれける

大輔　源たすくが女

なげきこるとハなげきを木になしてこるといふ。こるハ切也。つらづゑハ頬杖也。今ハかうづゑと云。薪などを負ひ行もかゝるときハ杖をさゝえるを今もさをいきづゑと云へ。人の物おもふ時手にてほゝをもつてはくぐとみゆるもあり。薪など負ふもの多く負ふ時杖して休むごとく。此歌ハこのなげき乃多しといふを杖のつくとも。こゝを俳とすべし

よみ人しらず

なげきをばこりのみ積みて足曳の山乃かひなくなりぬべらなり

山の峡あまりバかひなくとつゞきたり。上の句乃縁なるをつくそれにはなげきりがたき上の一首れ歌きといふハ人にそれ後のなげき也。其すのあかりて君親乃ために心を得ん事をなげくか。又ハ姫娠などしてせんなくなげくなり。此歌かひなくなりぬべらなといへるハ。ためあらはて身もかひハとなる也。身もなろびるんと。伊勢物語にいへるごとき也。山のかひなしといへる言俳なるべきか

人こふることをもふとみないもてあふこなきこそ佗しかりけれ

はるこハ無理字くの又逢期ともいへり。濁字の音を用ゐる例もまゝあれ
ばはもるべし。そもそも物をみなひもつあはせとそへり。はるこハ枴の
字擔乃字なり。人をころす心を重荷のごとくそりて。枴なくてはさ
まざといふハ恋乃とげぬを云ふ。重荷とさと枴といふるが俳なり

よひのまにいでゝ入ぬるみか月のわれて物おもふころにも有かな

これてとの事ハおもひの甚しき。三日月ハよひの間西の方にしばしの間み
えてやがて入るをゆゑ思ふ人にあひて見ぞハしばしハあひ。まじひ有
ちてわかれしゆゑ。しきりにおもひて。三か月も割さるごとく見ゆるゆ
ゑなく比ぶみしより。俳ハ是なるぞ

ろへ来とて花を紙ばかくをとふくをまばあるいはいらぞてはなさきる　はるは

宗雅批にさてとてときにまばかりかくすまぞあるいひしらず。あ
ちこちをるとばなとく。こ紙にて哥乃大意ハきこえてなり。この哥

より雑の哥なり。此初の五もじ題照へもいへておもへりとりん注せら
れたり。此哥乃外見及ばぬ詞もあるいひしるたてハ言語もおよば
ぬと云るにあらさきるさかるさこ雨とも。詩經の左右采之をあさ
きるさ所にまてとるふと古くよみ来たり。それぞれとるとなふ
はさるさとハ似たるなるにて別がれくと云ひ。これとしくまれる
どいふ言と一ッにて言の本をまもれバとハ解しぞしくをさらぐくハかなるべし。
諧ぶんなり。こでもこれにてみまだ又たやむそそるもかくむとべハまさ
とろし。これバかくやくたればと三ッに詞を設て。とまんりうけつ。又
かかゆりときつそるを云。かく種々みなるとの左右よりありほどふと
こらく説ときまざ。此そへみとてハ。副の字乃心にて。事の種々にいやうと
にそへりかなるとみても通ずべし。此る是飛のむりうしたるをよ
める哥も。俳ハいで来り雑し

世中のうきたびごとに身をなげハ深き谷こそあさくなりなめ

うきよの切なれバ身を谷にもなげんと思ふものゝ又世にすむ人に慈乃なき人もなけれバ人ごとに身をなげバ谷もうまりてあさくなりなんとの。世のうき井にをりて人のうへを行るべきことこそ。人乃死骸にて谷これあさくならんと云が俳なり

在原もとかた

世中ハいかに苦しと思ふらんこゝらの人に恨らるれば

貴賤男女都鄙にのぞみて世中ハうらみをのとてうらみらるゝハ世中ハいかばかり人にいひそしらるゝをくるしくおもふらんとの。此哥も上の哥と同じく。世の人乃理非達せずして益もなきことにうらみをふるといましめたり。世中に心をうつさせたるが俳也。大抵世中ハ人をこゝろまゝへしめぞ。人自ら愁るところなるべきなり

よみ人しらず

なにをして身の徒に老ぬらん年乃思はんこともやさしな

栄雅やさしきハ恥かしき事なり。やさしをやさしともいへり。驕乃音字をやさしとするくよめり。此哥又年に心をもたせたるを俳とせり

おきかぜ

みハすてつ心をだにもはふらさじつひにハいかゞなるとしるべく

はふらさじハ溢の字をよめり。ものゝ多くて外へながれ出るなり。紀氏をもすてゝ心の放ち出るなり。今も物をすはふる事をはふるといふなり。此哥乃心興風もとより微官なるをなげきをも辞しぬれバ身に衣冠をはなるゝ事もなかりけれバ身をすてたるといへり。身ハすてゝなれども心ばかりともすてず礼義を守るべき事なれ。しかし心をもすてなバ終りハいかなるよからぬ人となりなんもしらねど。心をすてはふらさずんバ終り乃人がらいかんとおもふの今より知らるゝとぞ。此哥をあぢハひてみれバ興風ハ有徳の人なるべし。自余の哥ハいかなる名哥をよみても哥の上手ハ志らるれども其人がらハ志られぬぞ。古語にも詩をよんで其

人を恋るとハのるを云べきぞ身をすつるとハいつべくぶををてそふる
とハ夢ゝ云まゝ〻ハこゝを俳とを

みはやと

ゆゝ雪乃とゝもみとゞ身ハふり埋とゞ白き花ぬ梅ぬ咲ける

ゆゝ雪ハ白き梅の姿と云ぶを消ぬと云ふり心の消ぬと云俳あるべし

よみ人しらず

梅花さきて其後の実なるぞやゝ黄色のとゝ乃ゝ人やいふらん

伊勢物語ゆいろこのみすきものといふりすきをいんとて梅と云出せるゝみをいんとてちきての後といふり身ゝ梅の実をそゝり梅乃実ハ味のをゝゆゑすきとゝゆゝり可ぶハ世乃人の我を色好のすきものといふハ云あやまりゝされども人乃ちゝふもとハりゝ吾ハ年ゝゆて文もかゝぶ花ゆていぶ花ちりすぎて実のなる

どくなるゝばすきゝみとゝいふゝとゝりあるゝと載ていつるゝ滅ゆよき俳なるべし

法皇ゆしぶハ月れハしまゝ〻ありける月さゆ山乃うひ月ちゝぬゝといふことを影ゝてよゆゝ世ゝふゝる

みつね

峡の一字ゆて山のうひとよむゝ山と山とのあるを云ゝ唐詩ゆ巫峡啼猿数行涙とあるゝよゆゝを山を巫ハよまゝ〻ゆゝ巫ゝ詩書ハ前乃貫之乃鶴立洲と云題ゆてよまれゝ詩と同じ時とゝ乃ゝ行の題猿叫峡なれバ三字づゝの対せる題とみそゝり巫詩世ゆ文字乃行ゝ巫ゝる付ゆゑ影も風流ゝて文字もよゝ後世の題ハ文盲なるぶ多し

わびしらゆはしらるゝきそ見渡せ山のゝ色ある紅葉ハ何ゝぬ

わびしらゆまゝらゆきそ。法皇の御幸ゆれバ山のゝひあるゝふゝそハ

なるこゝろあり。常雅抄　古来詩ゝ猿翁ハうゐ〳〵くて人のきて源を
俗ゝと作るゆゑ。それをとりけてうく云てよろこバ〳〵く作りなをるゆ。
ゆゑ〳〵ハとゞ〳〵ゝ。わび〳〵らゝ俗〳〵らといふる言乃もう〳〵きを俳と
も。ま〳〵らハ猿の一名あり

世といとこのをゝしどよりてうほぶ〳〵ぞめ乃あきのきぬし　よみ人〳〵らを

たれ物侍をゝきバ世ハ遍照ゝよめる歌なり。題照の注ゝあさぎぬを
ふ〳〵ゝそゝをゝる事を本のをとゝゝうつゝそあどほぶ〳〵ゝ。るハ〳〵
常ゝるゝどゝ。てあをのきゝもそバさまゝも祢ず〳〵てゝ。ゝろぬゝもるハう
ほぶ〳〵ゝもぬ〳〵ゝ事ゝるゝ。ばうつぬ〳〵ぞめとゝ。愚案ゝ出家ハ同
じ形ゝ三宿せゝ。林下石上を坐とゝをれバ。木の下ゝどゝ云ゝよるといふ。和
抱信ゝ人乃をとゝゝ袈裟あ〳〵ひゝゝゆゝるゝとてとあり。そゝ也ゝ云あさ乃
きぬゝゝりとほぶ〳〵ゝ。ゝろ〳〵ぶ〳〵といふ詞の俳とゝなをるゝ。

元禄十年丁丑秋八月廿三日　東花坊解

天明二壬寅孟春

大坂書林　荒木佐兵衛

京都書林　梅村宗五郎

江戸書林　山﨑金兵衛